論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨 お よ び 担 当 者

報告番号	※　甲　第　　号

氏　　名　　中村　夏葉

論　文　題　目

現図曼荼羅の成立に関する研究
−空海請来本系にみる図様改変の問題を中心に−

論文審査担当者

主査　　名古屋大学　教授　伊藤　大輔

委員　　名古屋大学　教授　木俣　元一

委員　　名古屋大学　教授　栗田　秀法

委員　　名古屋大学　特任講師　松井　裕美

委員　　名古屋大学　教授　斎藤　夏来

委員　　神戸大学　准教授　増記　隆介

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

【本論文の概要】

本論文は、日本の密教において最重要視された両部曼荼羅の内、空海が中国から請来した原本に基づく現図曼荼羅について、その成立の思想的背景を掘り下げつつ絵図としての構造の特性を明らかにしようとするものである。

まず序論において、考察の対象となる現図曼荼羅の定義を試みる。筆者は、「現図」の語義と現存する実作品の両面から空海請来原本の姿を探りつつ、金銀泥で描かれたいわゆる「高雄曼荼羅」が現状においては空海請来原本に最も近いことを認める。

続く第一部では、両部の内、胎蔵曼荼羅についての考察を行う。第一章では、虚空蔵院に注目する。その主要三尊である虚空蔵・千手観音・金剛蔵王の三菩薩は、如来と同等の宝蓮華座で描かれ、虚空蔵は五仏宝冠を頂く特徴を持つ。その由来を浄土経変相等との類比から解釈し、虚空蔵はその上部に曼荼羅が構築される土台としての須弥山、千手と金剛蔵王は須弥山の両脇に浮かぶ日月にもとめ、現図胎蔵曼荼羅が積層的な宇宙の構造を横から眺める視線で描かれているという空間構造の問題を論じる。

第一部第二章では、曼荼羅中の門の位置が、対称性を持たず、最外院西側から釈迦院・文殊院に至る中央縦軸に配置が集中していることに着目する。これを前章で論じた須弥山を基軸とした宇宙観の影響としつつ、門はより抽象的な法門として描かれていると論じる。大日の上部に位置する釈迦と文殊は大日と一体化して自利の行を完成させた行者が進むべき利他の行を示しており、それは釈迦・文殊の性格とも一致するとする。また門は衆生のいる外の世界とのつながりを示す象徴とみなす。

第二部では、金剛界曼荼羅についての考察を行う。第一章では成身会の大円輪を支える四大神に着目する。成身会四大神と類似する図像を尊勝曼荼羅に見出し、典拠の善無畏『尊勝儀軌』が曼荼羅建立の前提として五輪道場観を強調する特色があることから、四大神は地・水・火・風の四輪の視覚化であり、空輪としての大円輪を支えているという構造を示すとする。これにより、金剛界曼荼羅でも須弥山世界が基底に置かれていることも示した。補論としてチベットの生死輪図との関係性も考察している。

第二章では、金剛界四印会の大日が特異な四仏宝冠をかぶることに注目する。四印会は、金剛界曼荼羅の成身会・三摩耶会・微細会・供養会の四会をとりまとめたものとされ、宝冠の四仏はこの四会を象徴し、自利の行の完成を示すとする。また、金剛界曼荼羅の上段三会は、中央の一印会の大日が自利利他の総合、左の四印会大日が自利の完成、右の理趣会金剛薩埵が利他の実践を示すという対称的構造を作っていることを指摘する。

最後に附論において、両部曼荼羅を成立させたとされる恵果の思想を検証し、上述の両部曼荼羅解釈の歴史的妥当性について検討を加えている。特に恵果においては、曼荼羅を秘蔵するのではなく利他行の観点から一般に公開することに熱心だったとされ、これが現図系両部曼荼羅の構成に少なからず影響を与えたことを論じる。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

【本論文の評価】

本論文が取り扱う現図曼荼羅は、所依経典である『大日経』および『金剛頂経』が成立したインドの中期密教を思想的源流に持ち、中国の八世紀末頃には遅くとも図像構成が完成し、弘法大師空海によって九世紀初頭に日本に持ち帰られた曼荼羅である。しかし、この系統の曼荼羅は現在日本にしか伝わらず、その成立過程は十分にうかがい知れない。特に、現存するインド・チベット系の曼荼羅が所依経典に比較的忠実であるのに対して、現図曼荼羅は相違する点が多く見られ、文献との対比によるのみではその構成原理を理解することは困難である。そのため本論文では、伝統的な密教学の文献中心の分析手法から一旦離れ、曼荼羅の視覚的要素に着目することで、図像構成の原理と成立時の思想を解明しようした点に新しさが認められる。

例えば、第一部第一章において、円輪内に収められる千手観音菩薩と金剛蔵王菩薩を日月と見なし、抽象的な平面上に展開すると考えられがちな曼荼羅に、立体的な空間性を見出している点に新しい構造把握の仕方が示されている。或いは第二部第二章において、大円輪とそれを外側から抱きかかえる四大神の図像が、尊勝曼荼羅の図像と一致することを見出し、両者を関係づけて考察する点にも、視覚的要素を重視する筆者独自の思考態度を見出すことが出来る。

また、曼荼羅内に見出された立体的な空間構造を、より具体的に、須弥山世界の投影と見なす点も筆者独自の解釈である。これにより、従来、正四角錐の仏教的構造物を上から眺めたものとして把握されていた曼荼羅の構造を、九十度視点を移動して、須弥山を中心に下から上に積み重なる積層構造を横から眺めたものと捉え直した点も画期的である。

そしてその根拠を、曼荼羅を観想する行者の実践的行為に求めている点も筆者の論の特色である。曼荼羅は、大日如来との一致を求めて行者が観想の対象とするものであるが、筆者は特に胎蔵曼荼羅において、画面下方の門から曼荼羅世界に入り、中心の大日如来に至るという修行過程、さらに自利の行の完成後に向かうべき利他行への展開過程などが尊像の配置構成に反映していると指摘する。その下から上への移動過程を須弥山世界の積層構造と一致させて理解したことも筆者の功績として特筆される。

しかし、これらの議論は、金胎二部の曼荼羅のきわめて限定された部分への言及から引き出されており、曼荼羅全体の構造分析としてはやや手薄い印象も否めない。また横方向からの視角と上方向からの視角の区別が曖昧な場面も時折見られる。

とはいえ、須弥山世界を基盤に曼荼羅の構成を宇宙論的な広がりの中で捉えて新しい曼荼羅構成の読み方を提示した功績は高く評価されるべきであり、上述の瑕疵も今後の論の積み重ねで十分克服されるはずのものである。

以上により、審査員一同、本論文を博士（文学）の称号を授与するにふさわしいものと判定した。